河毛先生秘蔵書

夢中論談之巻

書者

渡邊義種

夢中論談序

我幼少より射芸にたよりて学(まなぶ)と雖(いえども)おろかにて其の徳を得ず。然りといえども先師正次心をつくし導きたるによって既に印状を給まはる。

并(ならびに)吉田の門人正勝に射伝を受て免状を得たり数年鍛練するとはいへども射行に奥なし。両師の教祖父光義が一流を父光朝他にかたるを若年の耳にたばさんで諸流に合し是を家伝とす。されども射道不明に依(より)昼夜工夫の床に眠る。ある夜老翁と見へて枕にたたずむ。咎めて亡父と答ふ驚きあへて合掌す。

論談

亡父問て曰 それ弓は万流一同其形正也先足踏は如何に心得たるや。

我答へてそれ足踏は三つの曲尺に定まりけり。然と雖足踏は法有て法なし。無法して法あり。身の矩、場ノ矩と定めけるとなり。

亡父の云 法ありて無法。亦法なふして法ありとは何れの矩を定めけるや。

答て外の矩 中の曲尺 内の矩三つなり。然共三つの矩に合不場にては諸々の矩を略し申也。去に依て法ありて法なしされども胴作りを以て三つの曲尺に合せける故無法して有法と定め申也。是を五法五段の胴作りと申なり。

亡父の云 五法五段の胴作りとは五つの胴の事か。五法とは去る事也、五

段とはいかに。

答へて曰(いわく)、五法の胴と申は、懸かる胴、退(の)く胴、屈(く)ぐむ胴、反(そ)る胴、奥中に在(ある)胴。この五つを合して五法の胴と申也。竪一文字の中すみを常の胴と申なり。然れ共残る四つの胴を何も用場有り。かかればかかる中すみ、のけばのく中すみ、くぐむもそるも竪一つ矩(かね)に合ける事是を五段の胴作りとも申也。横一つの矩(かね)色々そのさた品ありといへ共足踏の内の矩(かね)に合けるを竪横そろへる曲尺と申なり。

亡父の曰　はなし無きと云事如何様に心得たるや

答てはなし無きと申事押手へ延(のびる)の心を付て手先はなれに成様(なるよう)に鞲(ゆがけ)にあはいをすべしと世の常の教に有。是ひが事なり。うっかりと

あわひをする事却えって身の病を求るに似たり祖父の傳に息の運びと秘せられけるはこのはなし無きの事と申か息の運びと申に色々品々口傳ある事也。

亡父の曰　弓に三つ物射揃と云事いか様に辨(わきま)へけるやにや。

答て射中(いあて)　射貫(いぬき)　射飛(いとび)する事是三つ物也。

亡父の曰　射中射貫射飛する事さる事なり。是三つ物とは云かたし。

答て皮肉骨の三つ揃を三つ物と申也。

亡父の曰　紅葉重といふ事すべて手の内の事と世に印(しる)しおかれけり。如何様に辨(わきま)へけるや。

答て紅葉重と申事諸流に手の内に限る様に沙汰せり。是僻事(ひがごと)也。祖

父光義の射伝に弓に紅葉重といふ事品々にあり。去に以て紅葉重の手のうちとは申とかや。紅葉重の掛心息合心持なとと云り。

哥(うた)に

諸々の紅葉重の息合も朝嵐には　はる(晴)ゝ村雨

亡父の曰　十束引て十三束に成、十三束引て十束に成とはいかに。

答て十束引ても呼吸のたるみなく弦の道、矢の道にも不違時は十三束に同じ。十三束引ても其息のぬけて離るる時は十束におとれりとかや。

亡父ノ曰　十三束引ても十束に成(なり)放れさる事也。十束引ても十三束になる

とは己が勢力の外如何に。

答て去は手に手を加へ矢に矢をかけ韈に掛をくわゆるとのこの間なり。引ぬ箭(や)束と申事。世に色々説ありといへ共十束引て十三束の心に同じ。是を吉田流二段の重位の重なと申事是なり。

亡父の曰 弓に秘事有か亦無か。

答て秘事有て秘事無(なし)。勤て懈(おこた)らぬを秘事とも可申(もうすべき)か。然共弓に三ヶ條の秘事ありと承及候(うけたまわりおよびそうろう)。

亡父の云 三ヶ條の秘事とはいつれをさして申か。

答て一つには弓構。二つには打起。三つには手のうち。

諸々の曲尺に合、己が心のの矩(かね)に不有を三ヶ条の秘事共可申(もうすべき)か。

亡父の曰　惣(すべ)て弓の指南いか様に心得けるや。

答て初心の弓の直し方譬は若木の枝のごとし。その身の器用を育て教へし直なるを直とせよ。ゆるめるを直とせよ。技の至りて心の愚なるは徳の本なり心の至りてわざの愚なるは質の本也。直(なお)すに質有直さぬに徳有不器用をそしらず器用を誉る事なかれ。

亡父ノ曰　中(あた)りと云事如何に辨(わきま)へけるにや。

答て的の当り亦は惣(すべ)てねらひを定る事狙ひに中りなく中りに狙いなし目に留る時は外也。心に留まる時は中る也。中(あたり)て不中(あたらず)あたらずして中る時といふ是なり。

亡父の曰　はなれといふ事ありや又無や。

答て有共無共申可か惣て弓に放れなし心にはなれ有と申。それ放れは形有て形なし例えば影ほうしのごとく影ありて影なし。求る事なし。心ざす前後我も弓も知らずして勢分まではなるるを離れとや申可か。

亡父の曰 諸々の射法を勤めて過去現在の二つは是則はなれ也。勢分まて離れ候事離の根元也。然といへ共形有て形なし影有て影なく。心ざす前後弓も我も知ずして離るるといふ事心得がたし。吉田の奥儀に求て求ざるといふ事あり。第一学輩に伝へき便り弁がたし。弓に知ずして躰に見つる離はいかに祖父光義が家伝に陰は陽にて導陽は陰にて止むると云こと有。亦瀬尾が一流に弓に曲尺有り。矩に矩ありつ、かねて惣まくりの矩と

秘する事はこの事也。己が弓に曲尺を当と程を知て勤を射道の根本といふ也。然(しかり)と雖(いえども)極めて秘する事は芸の至ざるが故也。能々鍛錬すべし。我口をとぢて夢覚め、あわれこの道の達者道引ためへかし。

右之一冊亡父教雖二不レ及一我論為二執行一之

依書記之名夢中論談記ト編レ之

渡邊　義種